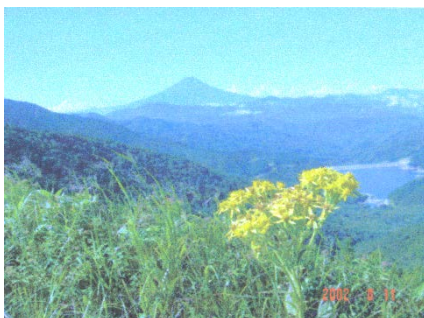
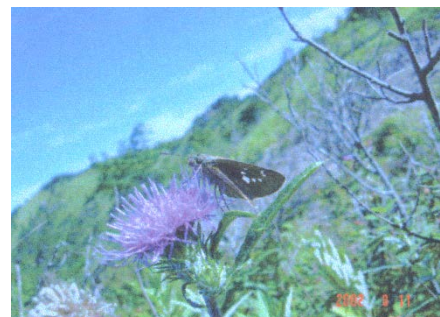


Aug. 11, 2008：山梨大菩薩峠。見事に晴れわたった天候で賽の河原へと少し進んだ稜線左手に富士山がくっきりとそびえて見える。



あいかわらず瓦礫の多い平坦地にどうやって利用するのかわからない山小屋がぽつんと建ち、何本かの細い登山路がこの平坦地からのびている。道路わきにはアザミの花が多く、わずかにマツムシソウ

の薄紫や紫のクガイソウが目立っている。キベリタテハが訪れるとすれば後者の花々が考えられるが、直感的にはキベリタテハが好む環境とは思えない。30分ほどねばってみたが、アザミ花上で転々と遊ぶ、初の出会いとなるオオチャバネセセリをいいアングルで映像化できたのが唯一の収穫で、キベリタテハは下の林道沿いでしか期待できないと判断して下山する。セセリチョウの仲間は胴体背中部の細毛がはがれ落ちやすくして見栄えの悪い標本しか作れないため、ほとんど採集の対象としていなく、大菩薩峠でも上記写真撮影しか残していない。



一方、加古川の里山・ギフチョウ・ネットの会員となって地域の小・中学生たちへの自然教育を意図するようになって、加古川市周辺に生息するチョウすべての標本を整理しておく必要があると考え、その努力を始めているのだが、2011年10月、ヒメヒカゲ幼虫の調査に出かけた草原で、イチモンジセセリに混じるオオチャバネセセリを観察。ケネザサが多い環境で、ススキやチガヤもあることから、それらのいずれかを食草として発生したものと思われ、写真記録を撮ったあと捕獲して標本とした。



本種はイチモンジセセリとよく似ているが、後翅の白紋が一直線に並ばない点で区別できる。その後の観察で加古川では6-7月と9-10月、年2回発生していることを確認できたが数は多くない。2015年にはケネザサの多い小道沿いで交尾個体の観察記録が撮れ、安定的な発生を繰り返していると考えられる。

本種はイチモンジセセリとよく似ているが、後翅の白紋が一直線に並ばない点で区別できる。

その後の観察で加古川では6-7月と9-10月、年2回発生していることを確認できたが数は多くない。2015年にはケネザサの多い小道沿いで交尾個体の観察記録が撮れ、安定的な発生を繰り返していると考えられる。

